

目次

ページ

2011 特別講演会	民俗芸能の伝承活動～広島「神楽」を中心に～ (三村泰臣 氏) .....	1
第1回都市計画研究会	環境モデル都市「栲原町」まちづくり見学会 .....	3
第2回都市計画研究会	中四国発・低炭素社会とまちづくり - 現場に学ぶ技術と暮らし - (清田誠良 氏) .....	5
都市計画サロン	神戸市の震災復興過程における都市環境の変容に関する研究 (村上 しまり 氏) .....	7
都市計画サロン	本会支部会員による東日本大震災活動報告 (北本 拓也 氏、宮迫 勇次 氏) .....	8
かやぶきシンポジウム2011	.....	9
ホットコーナー・コラム	福島、郡山市の応援に行って (広島市 福馬晶子) .....	10
会員紹介	張 峻屹 氏、岡村健志 氏 .....	12
トピックス	京橋会館公開イベント (アーキウォーク広島 福馬晶子) .....	13
本部理事会報告	.....	15
お知らせ・今後の活動計画	.....	16
編集後記	.....	16

2011 特別講演会

テーマ: 民俗芸能の伝承活動～広島「神楽」を中心に～  
 講師: 三村泰臣 氏 (広島工業大学環境学部教授)  
 日時: 平成23年7月23日(土) 15:00～17:00  
 場所: 広島県情報プラザ 視聴覚研修室  
 主催: 日本都市計画学会中国四国支部  
 参加者: 22 名

今回こうしたテーマを取り上げた理由は、民俗芸能が地域のコミュニティや生活空間と一体のものであること、これまで支部において生活文化をテーマとして取り上げていなかったことです。さらに、三村氏の講演から、民俗芸能が暮らしや地域のこれからにとって、重要な役割を果たしていることを知るようになりました。三村氏は、全国各地、さらには中国、東南アジアなどの民俗芸能を研究されており、専門は哲学・民俗芸能です。また、



講演者の三村泰臣氏



会場風景

理学部を卒業後、大学院で哲学、神学を学ばれたという、多面的なキャリアの持ち主でもあります。

講演は「民俗芸能」、「日本の神楽・広島神楽」、事例を通じた「民俗芸能の伝承活動」の順で進められました。

1 民俗芸能

最初に「民俗芸能」とは、庶民が参加し、演じる伝統的な芸能であり、それが能や歌舞伎などと異なる点であり、内容は神楽、田楽、風流、その他に分けられるとのことです。また、民俗芸能は、表現と同時に、鑑賞者に深い印象を残して、消えてなくなるということが特徴としてあげられるとのことです。このうち神楽とは、神様が降りてくる場所「神座(かむくら)」が「かむくら」となり、さらに「神楽(かぐら)」と呼ばれるようになったとのことです。つまり、「神座」の前の神遊びということ。基本的な構成要素は、天蓋、太鼓、順逆の舞であり、これを守れば、どのように変わっても受け入れられるのでは、ということです。神楽(団体)の数が一番多い都道府県は宮崎県で約350団体、次いで広島県の約300団体だそうで、質は日本一とのこと。ちなみに全国では約5,000団体が神楽を演じているそうです。そして、神楽の面白さは、見ること、学ぶこと、話すこと、そして生かすことであるとのことです。

2 日本の神楽・広島神楽

日本の神楽は、大きく巫女神楽、獅子神楽、伊勢流神楽、出雲流神楽の4類型に分けられるとのことです。巫女神楽とは巫女の神がかりの舞、獅子神楽とは権現とあがめる獅子による祈禱、伊勢流神楽とは伊勢外宮の神楽役(かぐら)の神事を起源とするもの、出雲流神楽とは出雲佐陀大社の神事を起源とするものです。これらの主な分布は、順に全国、東日本、中部日本、西日本ということです。

広島神楽は、5種類あるそうです。安芸地域には芸北神楽、安芸十二神祇神楽、芸予諸島の神楽、備後地域には

備後神楽、比婆荒神神楽があります。このうち芸北神楽は演劇的であり、比婆荒神神楽は祭儀の性格が強く、その他は芸能的であるとのことです。

また、芸北神楽は、一般的には石見神楽といわれていますが、きわめて神楽が盛んな地域であり、独自の展開もあり、芸北神楽として確かな位置づけにあるとのことです。

### 3 民俗芸能の伝承活動

いくつかの事例をもとに、民俗芸能の伝承活動を紹介され、その中では神楽の魅力や可能性、そして課題を述べられました。

呉市広の小坪地区では、四国との交流や水軍の歴史などを伝える神楽が、今も盛んに行われています。江戸時代に大三島の大山祇神社の神楽を習い、小坪八幡宮の秋祭りに踊ったのが始まりとされています。以前は独身男性が舞っていましたが、現在では女性や小学生なども参加し、地域ぐるみで演じられているとのことです。



呉市広小坪の神楽(写真:三村泰臣氏提供、以下の写真も同様)

尾道市の浦崎町は、神楽の大変盛んな地域で、神楽シーズンである10月から11月の初めにかけては、町内のどこかで神楽が演じられているそうです。ここでも子どもも参加して神楽が演じられています。また、浦崎町の神楽は、菅茶山の描いた絵の様式が今も伝えられているとのことです。そして、子どもや若者、大人みんなが楽しさを味わうことができることも、スライド(写真)を通じて感じることができました。



尾道市浦崎町の神楽

こうした子どもなどの参加は、教育の観点からも大切な役割を担い、地域への愛着や帰属意識につながっているとのことです。しかし一方で、担い手の減少、指導者の高齢化が進むことが懸念され、神楽の継承、さらにはコミュニティの維持・活性化にも問題を投げかけているとのことです。そうした中、子どもが主役、大人はリーダーといった観点から、神楽の継承を図ることの大切さを指摘されました。また、尾道市の山波では、リーダーとなる人を中心に、衰退した神楽を再興されたそうです。そのキーワードは「人生祭りだ」であり、同名の本も出されたとのこと。

岩国市には重要無形民俗文化財に指定されている行波の神舞があります。古くからの様式が変えられることなく引き継がれ、7年に1度行われています。行波の現在の世帯数は、江戸時代の記録とほぼ同じだそうです。このことから、民俗芸能が根つき、継承されている地域は、コミュニティや地域空間の維持・継承とも無関係ではないと感じました。



岩国市行波の神舞

一方で、安芸高田市美土里町の「神楽門前湯治村」のような神楽と温泉施設を一体化した観光・交流の取組の例も示されました。会場からは、その評価に対する意見・質問も出されましたが、三村氏の意見は明快でした。「批判はあるが、新しい姿を求めていかないと、民俗芸能は残り得ない」、「民俗芸能を続けていくことは、地域を維持・継承していくことと表裏一体である」

最後に、バリ島のウブドの祭りを紹介されました。周辺の景観と一体となった中で、民俗芸能などが演じられる地域であり、世界中から多くの人々が訪れています。



バリ島のウブドの祭り  
(文責 山下 和也)

## 平成23年度 第1回都市計画研究会 環境モデル都市「梶原町」まちづくり見学会

2009年度末(2010.2~)からスタートしている「中国四国発・低炭素社会とまちづくり～現場に学ぶ技術と暮らし～」のシリーズ第6回目として開催された「環境モデル都市「梶原町」まちづくり見学会」の概要について報告する。

日時：2011年6月18日(土) 14:00～17:00

場所：高知県高岡郡梶原町

参加者：22名

### 1. 長いトンネルを抜けると、そこは『梶原』だった！

梶原町は高知県の北西部、愛媛県の県境にほど近い四万十川の源流域に位置し、町全体の約9割は森林、人口は4,000人弱、高齢化率は40%超のまちである。



美しい梶原の街なみ

広島から向かった筆者達はしまなみ海道を渡って今治へ、そこから南に向かって一路梶原へ。国道440号、四国カルストの下を通る約3kmもの長いトンネルを抜けると目の前には美しい街なみが突如として出現、梶原町到着！お馴染み川端康成の『雪国』の冒頭を彷彿とさせる光景にまずビックリさせられた。美しい街なみをしばらく進むと最初の訪問先である町役場に到着。木をふんだんに使った斬新なデザインの庁舎で我々を迎えて下さったのは梶原町環境推進課の矢野参事と内本参事。まずはお二人から梶原町の環境対策とまちづくりの取り組みについてお聞きした。



梶原町役場庁舎【CASBEEのSランク】

### 2. 梶原町の環境対策とまちづくりの取り組み

#### (1) 環境対策の取り組み

梶原町は“森、水、風、光”の自然エネルギーを活かした諸施策を展開しており、2009年には小規模都市町村型・環境モデル都市に認定(内閣府)されている。町は2050年、温室効果ガス排出量70%削減、地域資源利用によるエネル

ギー自給率100%超を目指すこととしている。

風力発電としては、四国カルストに設置された2基(総工事費約4.5億円、H11.10～運転開始)の風車があり、年間3,000MWを発電し約3,500万円の売電収入を得ている。この収益の一部を利用して、森林保有者への間伐交付金(10万円/ha)や住宅用太陽光発電の助成(20万円/kW)などの環境対策の促進を図っている。

次に、木質バイオマスの地域循環利用の取り組みである。町内にある森林資源を有効に活用したいが採算が取れない…そこで、間伐材を第3セクターのペレット工場が原材料として買い受け、加工・販売するとともに、削減されたCO2をクレジット化(J-VER制度：経済産業省)してペレット工場の運営に活用するなど行っている。また、学校などの公共施設内ではペレットストーブや木質ペレット焚冷暖房システムを導入しており、一般家庭へのペレットストーブ設置補助(補助率1/4)なども実施している。さらに、町産材を使った公共施設整備や日本初のLCCM(ライフサイクルカーボンマイナス)住宅整備など、木質バイオマスの地域循環の取り組みは多岐に渡っている。

次に、水を利用した取り組みである。一級河川渡川水系梶原川の6mの落差を利用して、最大出力53kWの小水力発電(工事費約2億円、H21.3～運転開始)を行っており、発電した電力は、昼間は中学校に、夜間は街中の街灯(82基)に供給しており、余剰分は四国電力に売電している。

#### (2) まちづくりの取り組み

梶原に到着してまず驚かされた“美しい街なみ”は「まち交・街なみ環境整備事業」で行っている。町の中心部を南北に貫く国道440号の拡幅を契機とし住民主導で「梶原町再生委員会(通称：たくみの会)」が組織され、行政は実質的に側面支援という形で事業は進められた。「たくみの会」は、土地区画整理事業のようなプロセスを自らで推し進め、用地費として支払われるものを組織でプールしてみんなですうといったこともやってのけた。

街なみ整備のテーマは“木と水をいかした、やすらぎとてなしのある街なみづくり”である。当該地区には昔ながらの街なみが多く残されているわけでもなかったため、保全・復元というよりも、歴史を踏まえながら今の梶原らしさを表現することとして整備が進められた。電線類の地中化、美装化した歩道、地域木材を活用した施設整備、統一感のあるファサード形成、津野山神楽のモニュメント設置など、落ち着いた美しい街なみとなっている。また、街なみ環境整備の取り組みは、第3回まち交大賞プロセス賞(H20)、土木学会デザイン賞(H22)など、数々の賞を受賞している。



町役場(議場)にて

#### (3) 質疑応答など

環境対策とまちづくりの取り組みのお話を聞いた後、質疑応答がなされた。

Q1)現在の電力自給率は？ A1)26%程度である。2050年の100%超の実現を目指し、民間活力の導入により風力発電を40基まで増設する計画である。

Q2)取り組みを進めてきたキーパーソンは？ A2)環境対策に関しては新エネビジョン(H10.3)の策定を起点に町長がリーダーシップを発揮して推進してきた。まちづくりに関しては「たくみの会」が主動してきた。

Q3)環境対策や街なみ環境整備などを進めてきた結果、人口はどうなった？ A3)少子高齢化が進行する状況下で、自然減ではあるが社会減は歯止めがかかっている。

Q4)木橋は維持管理に費用がかかると思うが？ A4)10年サイクルでの修繕計画を立てている。補修には補助事業が使えないため、交付税なり町単費で対応する。木である以上、維持管理に費用が掛かることは覚悟している。今のところ町財政も健全であり問題はない。

Q5)まちづくり全体の事業費は？ A5)全体としては整理していないが、数十億円規模になるだろう。まちづくり交付金事業や過疎債を有効に活用しながら予算を確保している。柏谷先生補足 梶原は国交省四国地方整備局が、ひいては霞ヶ関がバックについてまちづくりを進めてきたとも言えるまちである。近年の四国地整の局長をつとめた方はみんな梶原の大ファンである。こうした国との連携・支援関係を築くことができたのは、住民主導で何事も積極的に取り組む体制があったからである。通常、行政主導での地権者調整は非常に時間が掛かったりするものであるが、梶原は違った。国が手を焼かずに、「たくみの会」を中心に、住民が自ら動き、自ら調整しながら事業を進めていくのである。他の地域にはない、「地元の行動力」「高い協働・協調意識」「前向きなマインド」がここにはあり、梶原に関わった外部の人々はそこに魅了されるのである。

### 3. 現場見学

活発な質疑応答を終え、現場見学へ出発！梅雨の最中、生憎の小雨であったが、見学会に参加した皆さんは熱心にメモ取りながら小水力発電施設や木質ペレット工場、雲の上のギャラリーや美しい街なみを見学した。

#### (1) 木質ペレット工場(ゆすはらペレット)見学

工場長の案内で施設を見学し、事業内容の説明を頂いた。



ペレット工場の様子

「ゆすはらペレット」は梶原町、矢崎総業、森林組合、高知県の協働事業として平成20年度より供用開始した。総工事費は約2.5億円、運営は第3セクターゆすはらペレット(株)である。粉碎機と、乾燥機、成形機2台で1,800t/年の生産能力を有するが、昨年度は1,200t/年程度の生産にとどまっている。原材料は間伐端材を4,000円/tで地元から仕入れ、ペレットに成形して35,000~40,000円/tで販売(そのうちの約1/3は町の公共施設で利用)している。工場設備は矢崎総業の協力を得て開発・導入したもので、販路開拓・販売も同社が中心となって行っている。また、



積み上げられた袋詰のペレット

全木(皮ごと全部)を使ったより燃焼効率の良いペレット生産も継続研究・開発中である。一般家庭へのペレットストーブ設置には、町が費用の一部を補助(費用の1/4、上限75,000円)しているが、50~60万円/台と高価であること、煙突設置や灰処分等の課題から普及し難い状況である。

#### (2) 雲の上のギャラリー、美しい街なみ見学



雲の上のギャラリーの様子



内部



見上げると...

次に、町役場から東へ約2kmほど離れたところにある「雲の上のギャラリー」を訪れた。ここは「雲の上のホテル」「雲の上の温泉」「雲の上のプール」が集積した町民と来訪者の交流拠点である。到着して直ぐ「雲の上のギャラリー」が目飛び込んできた。勿木(はねぎ)を幾重にも組み合わせさせたような存在感のあるデザインで、「雲の上のホテル」と「雲の上の温泉」を連絡するように配置された展示イベントスペースである。整備には町産材の杉と桧が使われ、総工費約3.6億円、まち交事業によるものである。

ゆっくりと「雲の上の温泉」に入りたいところだったが既に夕方...一路まちの中心部に戻り、美しい街なみを散策。ここでもまたまた特徴的な建物が目飛び込んできた！「まちの駅」である。交流機能・情報発信機能・地域連携



まちの駅の様子

## 平成23年度 第2回都市計画研究会 中四国発・低炭素社会とまちづくり - 現場に学ぶ 技術とくらし - (シリーズ第7回)

テーマ：自然エネルギーと生きる緑化施策

講師：清田誠良氏

(広島工業大学工学部建築工学科教授)

日時：2011年8月6日(土) 14:00~17:00

場所：広島県情報プラザ視聴覚研修室

参加者：13名

機能を備えた施設としてH22に完成、総工費約4億円、これもまち交事業によるものである。1階部分は特産品販売スペースで、2・3階は宿泊施設(マルシェ・ユスハラ)となっている。「まちの駅」の東側外壁面は茅葺であり、建物が呼吸する造りとなっている。また、屋根には太陽光パネルが設置され、四国初の電気自動車の充電施設もあった。

「まちの駅」の裏を流れる栲原川には「栲原橋」が架かる。橋長約30m、車道5m、歩道2mの町産材(集成材)を活用したアーチ橋で、これもまたインパクトがあった。ここまで木にこだわるのか!と驚いたのと同時に、環境対策と町産材活用の徹底したこだわりを強く感じた。(ここまで見てきた存在感のある「栲原町庁舎」「雲の上のギャラリー他」「まちの駅」は建築家・隈研吾氏設計によるもの)



木橋・栲原橋の様子



神楽のモニュメント(多数あり)

### 4. 見学を終え、意見交換会!

見学会を終え、みんなで郷土料理に舌鼓を打ちながらの意見交換会。地酒の味も格別で、飲み方も格別。クツと杯を空け、杯の口を指でサッとぬぐってご返杯!高知流の粹で、ヘビーな飲み方である。お店の方も客がストップをかけるまで次々とお銚子を運んでくる、まるで岩手名物わんこそばのようだ。そんな調子で意見交換会は話も弾み、消化しきれない思いはその日のうちにホテルに帰って第2回意見交換会開催である。……以下、賛否両論、喧々諤々交された意見である。(私の意見・感想も含めて)

- 栲原は維新の志士・坂本龍馬脱藩の地である。今なお維新の心意気は町の人々に受け継がれているのだろうか。住民主動によるまちづくりのすごみを感じたし、環境・エネルギー対策も他に先行している。
- 環境・エネルギーに関する取り組みを産業振興に如何にしてつなげるのかが課題である。
- まち交事業で相当の税金が投入されている。費用対効果はどうか、公平性はどうか検証が必要だ。
- 沿道は美しく整備されたが沿道住民以外の満足度はどうか、不公平感はないのだろうか。
- 橋を筆頭に、木へのこだわりは素晴らしいが、維持管理面等を考えた場合の持続可能性に課題が残される。多大な投資が短期間の延命措置に終わらないように。
- 華美とも取れる特徴的な建物は本当に必要なのか、過大な投資ではないか。
- 住民主動による街なみ環境整備は素晴らしい、何もしなかったら今どうなっていることか。これらの整備でアイデンティティが再興されたのではないか。まちのシンボルともなる特徴的な建物もアリだと思ふ。

第2回意見交換会は話が尽きることなく、栲原の静かな夜は更けていった。

……10年後の栲原はどのようになっているか、どう変化・進展しているだろうか、そのころまた訪れてみたい。

(文責：高田 禮榮)



小水力の電力でやさしく灯る街灯



2011年8月6日(土)、広島県情報プラザ視聴覚室で「中四国発・低炭素社会とまちづくり - 現場に学ぶ技術とくらし -」(シリーズ第7回、日本都市計画学会中国四国支部2011年度第2回都市計画研究会)が開催された。参加者は13名であった。

今回は、清田誠良氏(広島工業大学工学部建築工学科教授)をお迎えし、「自然エネルギーと生きる緑化施策」と題するご講演を頂いた。

講演の冒頭では吉田兼好の徒然草の引用から、日本の伝統的な建築における遣戸や葺戸による涼しさを得るための工夫が紹介された。また京都市貴船の川床を事例に、日本の伝統的な水を活用した涼み方や生活の工夫も紹介された。

自然環境に配慮したデザインの事例紹介では、環境先進国であるドイツの事例紹介が多いが、日本の伝統的な住まいや生活からも学ぶべきことも多いことを再認識した。

屋上緑化は、ヒートアイランド現象の緩和に有効であるが、講演の前半ではこの屋上緑化に関して、清田先生自身が広島工業大学の校舎の屋上で実践されている様々な事例をもとに、屋上緑化の要点が紹介された。

屋上緑化の施工状況では、ヘデラによる緑化、間伐材を用いた緑化基盤と芝生、トレイ式屋上緑化システムとセダム、サツマイモによる屋上緑化など様々な種類の屋上緑化とその緑化効果が紹介された。

植物や土壌の種類の違いによって、植物の生育状況がどのように違い、その結果屋上の表面温度がどのようになるかを、サーモグラフィを用いて分かりやすく紹介頂いた。

屋上階の屋根の断熱は通常は十分にされており、屋上緑化を施しても大きな断熱効果の増加は通常は期待できない

(一般的には1程度あるかないか)この点では屋上緑化よりも壁面緑化をした方が、日射の遮蔽効果や緑化による蒸散作用により、緑化による環境効果が表れやすく、その効果を理解しやすいとの説明があった。

また、屋上緑化の他事例に関しては、廿日市の広島市信用金庫の屋上や福岡市のアクロスの事例も紹介された。アクロスでは完成当初は76種類の植物であったが、その後、多くの植物の種子が鳥などにより運ばれ、現在は完成当初よりもさらに多くの植物が植生しているようである。

壁面緑化でも、広島工業大学での清田先生の実践例をもとに説明された。オーシャンブルー(アサガオの多年草)による壁面緑化が行われており、建物の西側壁面を覆うこの壁面緑化はかなり効果的なものとなっている様子が説明された。今年の冬は寒さも例年より厳しいこともあり、越冬することができないという報告があった。筆者も勤務先の学校でオーシャンブルーを用いた壁面緑化をはじめて3年目であるが、今年はその殆ど越冬できずに枯れてしまった。越冬のための養生については更に工夫が必要であることを感じた。

都市緑化の事例としては、鹿児島市や熊本市の路面電車の軌道敷きでの芝生による緑化の事例が紹介された。路面緑化では、芝生の水や肥料やりと芝生の剪定などの管理が大きな手間となる。鹿児島市の路面電車の軌道敷緑化では、芝刈りや水やりの専用列車を導入することで、路面緑化の維持管理を行っているらしい。また、熊本市では「市電緑のじゅうたん」のサポーター制度により、広く市民に軌道敷の緑化の支援を求めているそうである。広島市も路面電車でも有名な街であるが、ぜひ先進地のこのような維持・管理手法を導入することで軌道敷緑化の実現してもらいたい。

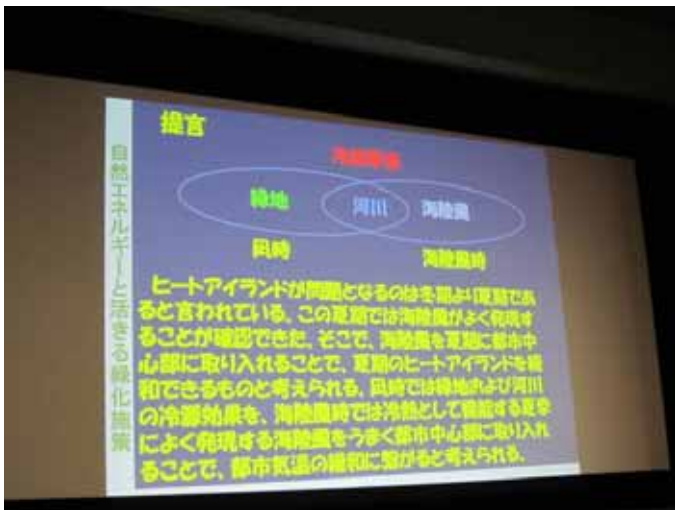
の河川が流れており、ヒートアイランド現象は発生しないが、緑化だけでなく河川と風を活用した総合的な都市環境対策が今後は重要になるとの助言を受けた。

講演後の休憩を挟み後半は、講師と参加者との意見交換が行われた。「広島市の街路樹は樹木の緑陰効果が活かされず、暑い夏を待たずに短く剪定されるが如何なものか」「広島市の緑化政策は後退している」といったやり取りが行われる一方、「五日市のコイン通りでは住民の積極的な提案・行動により杏の木が育てられている」などの肯定的な面も報告された。また、「広島市の河川の水の温度を活用はできないか」の発言に対しては「河川の水は干満差による影響が大きいので活用するのであれば河川よりも海の水の方がよい」との回答があった。

壁面緑化の効果と建物の方位との関係についての質問では、「壁面緑化は「西日対策」が最も効果的であり、南面の緑化はあまり大きな効果を期待できない。広島市では本庁舎の南面の壁面緑化をやっているが、それよりも中区役所の西側を緑化することが建築環境上は有効である」との助言が寄せられた。



都市計画研究会の会場風景  
(文責：篠部 裕 / 呉工業高等専門学校)



講演の最後では、清田先生の広島市の都市気候測定(気温、風向、風速など)を事例に、今後の広島市の都市環境対策についての提案が示された。夏の都市の気温を低下させるためには、都市緑化も重要であるが地域風(海陸風)の活用も重要である。広島市は河川上部を涼しい風が吹くが、これを東西方向の街路を通して街中に導く工夫やビルの高さに高低差を設けることで風を掴む工夫などが今後の課題であるとの指摘があった。広島市は中心市街地を6本

## 平成23年度第1回都市計画サロン

主題:神戸市の戦災復興過程における都市環境の変容に関する研究 ~ヤミ市の形成と変容に注目して~

講師:村上 しほり 氏(神戸大学大学院博士課程)

日時:平成23年5月13日(金) 19:00~21:00

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ

広島でも高松でも神戸でも、まちを歩くとき、どのようにまちが形成されてきたか?どのような歴史の上に立ってきたか?を考えることはあっても、聞いたり調べたりする時間を割けない方も多いのではないか?

今回は、神戸市において、どのようにまちが形成されてきたか、ヤミ市という切り口でスポットをあててみた。

神戸三宮周辺には、戦災復興過程において、人々の生きるための生活手段としてのヤミ市の歴史が深く刻まれていることを知った。

### 村上しほり氏による神戸の戦災復興過程のヤミ市調査

従前、日本各都市の戦災復興過程で、どのようにまちが形成されたかについては、国や地方公共団体を主体に、ある程度の研究蓄積はある。しかし、住民レベルの詳細な活動にまで十分に注意を向けられたとは言いがたい。

神戸においても、資料の不足などにより、本格的なものが行われていない。そこで村上氏は、ヤミ市にスポットをあてて研究を始められた!



### 神戸のヤミ市の形成と変容 (一部のみ掲載)

#### 神戸市中央区の戦前・戦後 - ヤミ市形成の背景

戦前から鉄道等の交通要衝である神戸三宮において、神戸大空襲による市街地消失、1939年実施の価格等統制令等による経済混乱、のなかでヤミ市が発生し、空間の占有が始まった。

#### 三宮自由市場の形成と変容

1945年9月の三宮ガード下に現れた五円饅頭の立売に始まり、高架下の床店・露店へと発展した。

1945年11月以降、床店・露店は急速に規模・形態を拡大し、高架下南側路上にも店舗兼住宅のバラックが建ち始めた。

ついに、三宮駅から元町駅、そして神戸駅までに至った約2kmのヤミ市は三宮自由市場と称された。それは、神戸大空襲に焼け残った高架下が利用した市場でもあった。また、このようなヤミ市の膨張に合わせ、商人組織の結成もみられた。

1945年9月には神戸新聞等では「闇市」と表記されたが、1945年12月になると「自由市場」と表記され、その名称は市民に浸透していった。

1946年1月から7月末にかけて、自由市場が拡大を続けるのに呼応して、段階的かつ継続的に、公権力による取締りが行われるようになった。

公権力による取締りとの衝突は多々生じたものの、全国

でヤミ市撤去が行われる中、兵庫県による取締りは比較的緩やかなものだった。結果、販売禁止品目の不徹底などにより、大阪や京都などからの批判も生じた。

結果、路上店舗については移転が決定し、県警と商人組織等との協議によって自由市場の分散移転が図られ、市内に複数のマーケットが誕生した。マーケットとはバラックの木造低層長屋の商業施設のことを呼んだとされている。

#### 三宮国際マーケットの形成過程

1946年8~10月にかけての三宮自由市場内商人の移転で三宮国際マーケットが形成された。

1946年12月に結成された、朝鮮人連盟に基盤を置く朝鮮人自由商人連合会がとりまとめた、三宮自由市場内の商人たちは、雲井通6丁目と旭通4丁目に移転した。同地に650軒の店舗建設を行い、ゴム製品卸問屋街・玩具菓子問屋街を形成した。

#### 高架下における店舗形成過程

一方、台湾省民会を基盤を置く国際総商組合がとりまとめた、三宮~元町間の商人たちは、他組織との協調によって三宮自由市場の維持を図った。

高架下の占有問題は、1947年6月に神戸市との6ヶ月賃貸契約が結ばれ、その後も、神戸市との折衝が繰り返された。



【写真】1946年の三宮自由市場 路上店舗も見られる



【写真】1946年の三宮国際マーケット

今回サロンは、広島のヤミ市研究に携わった石丸紀興氏も出席され、神戸と広島の比較も行われた。また年輩の参加者から広島の昔の証言もあつたりと、歴史を生で感じることができた。

神戸や広島を歩くとき、そんな歴史の1ページ、先輩方の1ページに思いを馳せてみたいと思う。

日本のまちは戦災復興が大きなベースになっている。一方、時間が経てば証言も減ってくるのも事実。

村上氏のような研究は、戦後65年を超えた今だからこそ大切にすべきだと思う。

(文責:渡田 賢治)

## 平成23年度第2回都市計画サロン

主題：本会支部会員による東日本大震災活動報告

講師：北本 拓也 氏(広島県総務局営繕課)

宮迫 勇次 氏((株)復建調査設計)

日時：平成23年6月2日(木) 19:00~21:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ

平成23年3月11日の東日本大震災では、地震だけでなく、津波、原子炉の暴走など、思いがけない大災害まで起きてしまった。

被災地で活動してきた方に報告をして頂き、「現場で何が起きているのか」「何が求められているのか」「今後できることはないのか」についてみんなで考えた。



### 避難所の運営支援について(北本 拓也 氏)

広島県職員として5/8(日)~5/14(土)の7日間、気仙沼市の鹿折中学校避難所へ派遣され、避難者と一緒に寝泊りし、避難所の運営サポートをされた。



鹿折中学校の避難者は210名。気仙沼市職員1名が常駐し(4名でローテーション)、広島県職員7名が体育館ステージに寝泊りしそのサポートを行った。

1日のスケジュールは、運営支援者は5時起床。その後避難者は5時半起床で、朝食、掃除を行い、9時に体操、12時に昼食、17時に夕食、21時消灯と規則正しい。

避難者は名簿、配置図、家族番号、位置番号により把握していく。

では、避難所で必要なもの、必要なこととは何か？

まずは、食事、毛布、暖房。食事については、朝食は菓子パン2個・牛乳又はジュース、昼食・夕食はごはん・味噌汁・おかずが基本である。水は貴重なため、食器はウェットティッシュ、ティッシュの順番で拭いていく。また、ゴム手袋を徹底し食中毒の防止など衛生管理に気を遣う。

毛布は十分に支給されている。が、寝るのは体育館の床の上。体操のマットや、柔道の畳、ブルーシートなどで底冷え対策を行う。

暖房は中学校にあったジェットストーブや部屋用ストーブ数台で凌ぐ。また、入浴は3日に1回だが、送迎バスの定員は28名で1台のみ。シャンプーだけなら避難所で可能である。

続いて、医療体制は、中学校の保健室に毎日医師が往来する。また、昼間は看護師が体育館ステージに常駐する。感染症対策は全員で徹底し、ドアノブの消毒や、トイレでは、廊下 洗面 トイレの2段階の履きかえを行う。イン

フルエンザにかかる者もいたが、広がることはなかった。避難所は自主運営が原則で、避難者みな、工夫と他人への配慮をもって運営されていたとの報告があった。北本氏自身、気仙沼市職員のサポートはできたが、サポートしきれなかったとの本心を打ち明けられた。

北本氏は、講演の最後に、講演内容は水道・電気が復旧した震災発生2ヵ月後の避難所であり、まだまだ知らなければならぬ事実がたくさんあるとの思いを述べられた。

### 未来をつなぐ道の駅~道の駅からの報告~(宮迫 勇次 氏)

コンサルタント技術者として4/10(日)~4/17(日)の8日間、気仙沼、南三陸町、石巻、名取を始め、東北全体において測量、避難計画や復興計画の立案をされた。



そのなかで道の駅にスポットをあてて報告があった。

東北の太平洋沿岸の道の駅は17駅。自衛隊、消防、自治体の前線基地になったものもある。

宮迫氏が赴いた道の駅は7駅。全壊した大谷海岸駅も施設の一部を仮復旧し、7駅は、救助・物資救援基地、避難地の役割を担っている。

例えば、道の駅・三本木では、3/11にストーブ設置、トン汁の提供開始、災害用トイレ4基組立、非常発電機稼働、段ボール敷での横になるスペースの確保、3/12におにぎり販売開始、防災用掲示板設置、3/13にガス復旧、3/14に野菜販売開始、新聞コーナー開設、3/15に携帯電話充電場所設置、3/19に水道復旧など、震災後は早急な復旧とともに様々な役割を果たしている。

道の駅の従来の機能は、休憩機能・情報機能。最近は、地域産業の活性化機能等も注目されている。それに加え、防災拠点機能にも注目する必要性を宮迫氏は痛感した。

道路と直接繋がった防災拠点として、避難箇所、物資の提供・保管拠点、運送中継拠点、道路情報や安否情報の発信拠点など、自治体や道路管理者等が総合利用の計画をしておくことの必要性を指摘された。食料供給能力の確保のため、周辺地域の農家・住民と日常的な連携を持つておくことも必要と指摘された。また、耐震構造、立地選定やアクセス設定なども重要である。

宮迫氏は、道の駅のこういった役割は、中四国地区でも期待できるとした。例えば中国地方では、全国に先行して人口減少や高齢化が進展しており、小規模集落や高齢化集落が全国で最も多い。また、中国地方全体は道の駅から30km圏内で十分網羅される。

未来のために、道の駅の役割を今一度考えるべきとのご提案いただいた。

実際に震災復興支援に携われた2氏の講演は、現場の状況、現場の声が、臨場感とともに伝わり、もっと知りたいとの質問が多く飛び交った。

中四国地方では、東日本大震災による生活影響はそれほどでない。生の声を聞かせて頂き、震災時に実際何が起きているのか、何が求められるのか、今後できることはないのか、考える貴重な機会となった。(文責：渡田 賢治)



## 講演・シンポジウムなど

### 東日本大震災チャリティーイベント かやぶきシンポジウム2011

日時：平成23年8月6日(土)10:00~16:00

場所：近畿大学工学部

プログラム：

#### 第一部 シンポジウム

- ・主旨説明 市川尚紀(近畿大学)
- ・中国地方の茅葺き民家の保存再生活動について  
上田進(西中国茅葺き民家保存研究会)
- ・大内宿のかやぶき事情 吉村徳男(大内宿結の会顧問)
- ・映画上映「福島・大内宿の葺き替え」
- ・質疑応答

#### 第二部 見学会

- ・茅葺き民家見学 上田進(前掲)
- ・パネルディスカッション  
パネラー 吉村徳男(前掲)  
石井元春(東広島市の茅葺き職人)  
上田進(前掲)  
佐藤弘政、妹尾章絵(近畿大学生)
- コーディネーター 市川尚紀(前掲)
- ・懇親会

- ・茅葺き民家の写真パネル展示長岡正宏(広島白茅会)

主催：日本都市計画学会社会連携交流組織「茅葺き民家保存・再生研究会」

後援：東広島市、東広島市教育委員会、NPO日本民家再生協会中国地区、西中国茅葺き民家保存研究会

参加者：85名

先人たちによって培われてきた『茅葺き民家』は、その防火性能の弱さや、人々のライフスタイルの変化などにより消滅し続けている。かろうじて残されている民家も、その多くはトタンや瓦で覆われ、茅の表情を残している民家は希少である。こうした中、東広島市には茅が露出している民家がまだ多く現存している。しかしながら、それらの茅葺き民家の認知度は低く、他の地域同様に減少の一途をたどっている。そこで、全国に先駆けて茅葺き民家の保存・再生に成功した福島の大内宿結の会顧問吉村氏を招聘し、東広島市に現存する茅葺き民家の保存・再生を考えるシンポジウムを実施した。参加者は県内外から85名(一般58名、学生27名)が集まり、一般市民の関心の高さが伺えた。

第一部では、まず東広島市の茅葺き民家の現存状況と、本シンポジウム開催の主旨説明を市川が行った。2002年では82戸の茅葺き民家が市内に確認されていたが、その後8年間で、消滅または被覆されて48戸にまで減少しており、茅葺き民家のある風景が危機的状況にあることを伝えた。次に、上田氏が西中国地方の代表的な茅葺き民家の紹介と、これまでの会の活動の紹介をした。上田氏は、本シンポジウム主催の茅葺き民家保存・再生研究会の構成員でもあり、今後のさらなる活動が期待される。

そして、本シンポジウムの主役である、吉村氏による大内宿の茅葺き民家を通じた、様々な地域交流活動に関する講演がなされた。大内宿では、単に茅葺き民家を残して観

光資源にするのではなく、茅葺き民家を保存・維持する活動を通しながら、地域住民の絆を深める様々な伝統行事を復活させている。吉村氏は45歳で公務員から茅葺き職人兼蕎麦屋に転職した経歴を持つ。今は、茅葺き職人の後継者育成にも力をいれている。大内宿の茅葺き職人は専門の職人ではなく「生活技術」として茅葺きを行っており、別に生業をもっている人が多い。つまり、公助だけでなく共助のシステムが確立しており、茅葺き屋根を葺き替える際の家主の費用負担はほとんどないという。吉村氏の講演後、大内宿にあるトタンで覆われた茅葺き民家の再生工事の記録映画を上映した。茅葺き技術の継承のために制作されたものであるが、東広島市の茅葺き職人も参加していたため、両地域の技術の違いについても活発な意見交換がなされた。

午後は、豊栄町能良にある空き家の茅葺き民家と三原市の専徳寺を見学した。豊栄の民家はこの地方の一般的な母屋と納屋が離れた形式の茅葺き屋根であり、今後は近畿大学市川研究室のメンバーで保存・再生プロジェクトを実施する予定である。また、専徳寺(三原市大和町和木、築260年)の宗派は浄土真宗西本願寺派で、本堂と庫裏(くり)それらを繋ぐ渡り廊下が茅葺き屋根である。大和町には、お寺の本堂が茅葺きというのが、他に2ヶ所あるが専徳寺が最大規模の茅葺き屋根の寺である。住まいである庫裏が民家形式を残しており、住職が茅葺き民家に造詣が深いため最近庫裏に囲炉裏が復活した。

最後に、長岡氏撮影の茅葺き民家の写真に囲まれながら、パネルディスカッションを行った。大内宿と東広島市の状況は大きく異なるが、大内宿が試みている茅葺き民家の保存・再生、さらに維持していくための様々な取組みは、東広島市の茅葺き民家の保存・再生を考える上でも、有用な示唆を与えるものであった。閉会後も、多くの参加者が残り、活発な意見交換がなされ、今後の活動に協力して下さる仲間が増えた。

なお、本シンポジウムは、日本都市計画学会の助成金で運営しており、参加費(13万5千円)は全額、東日本大震災の義援金として日本赤十字社を通じて送金した。



(文責 市川 尚紀)

## ホットコーナー

### 福島、郡山市の応援に行って

広島市 福馬晶子

平成23年6月2日に行われた都市計画サロンでは、東日本大震災の被災地へ赴いた都市計画学会中国四国支部のメンバーの話として、都市計画コンサルタントとして復興都市計画の業務に宮城県方面に赴かれた宮迫さん、広島県として宮城県で体育館に避難されている被災者の皆さんのお世話をされた北本さんのお話を伺った。

私も広島市の建築職として、郡山市へ応援に行ったので、その結果を報告する。

#### 1 応援の概要

私が応援に訪れたのは、郡山市役所の建築課で、行った業務は、罹災証明の発行に際し、専門職的な判断を行うものだ。平成23年6月26日出発7月10日帰広で週休1日の2週間、就業日12日間、就任した。

参考：郡山市と広島市の比較

	郡山市	広島市
人口	約34万人	約117万人
世帯数	約13万世帯	約51万世帯
総面積	約757km <sup>2</sup>	約905km <sup>2</sup>
都市計画区域面積	約270km <sup>2</sup>	約399km <sup>2</sup>
市街化区域面積	約69km <sup>2</sup>	約159km <sup>2</sup>
市街化調整区域面積	約201km <sup>2</sup>	約240km <sup>2</sup>

罹災証明は、見舞金や補助金を得るための根拠となるもので、丁度私が赴任した頃は、高速道路の料金を免除にする根拠ともなっており、まさに取らなくては損といった状態で、かなりの数の申請が出ていた。

しかも、一部損壊であれば写真等で判断できるのだが、その他損壊、大規模損壊、全壊となると、国土交通省出している基準に基づく主要構造部や内外装の被害かの判断等の専門的な知識が必要となる。

勿論、必要な専門職の数が足りないので、写真判定で済ませる一次審査の次には、収納を担当する事務職員などが現地へ行き、短時間で簡易に二次審査を行う。しかし、事務職の言葉では納得いかない、時間が短くてよく見えてもらえなかった、素っ気無かったので気分を害したなどといった苦情を含めた再審査を要求されることとなり、それが今回携わった三次審査となる。三次審査は、言わば専門職が行う苦情処理といったものだ。

三次審査に集まった建築職は、全国市長会で呼びかけられており、派遣された当時で、当広島市の外、島原市、久留米市、日置市、砺波市など、バラエティに富み、方言が飛び交っていた。

また、執務を行う場所も、元の建築課が入っていた市役所の庁舎が耐震補強がされておらず危険ということで、市役所裏の厚生施設に、建築課は和室の畳敷きの上に椅子と机を置いて執務し、私たち助っ人は会議室で執務した。



郡山市職員執務状況



他都市助っ人執務状況

三次審査の流れとしては、まず現地へ行き、建築物にお住まいの方へどのような審査をするかなどの概要を説明し、外部より屋根の落ち具合や外壁のヒビ割れなどの状況を確認し、柱の角度で建物の傾きなどを確認し、中に入り、内壁や天井のヒビ割れや剥がれ状況確認、床の傾きや柱の傾きを確認、天井裏や床下で梁や小屋組み・基礎・束などの確認を行い、結果を家人に報告して了承を得るといった流れだ。



#### 判定の基準

被害区分	被害の判定基準
全壊	家屋の経済付異善割合が50%以上のもの
半壊大規模	家屋の経済付異善割合が40%以上50%未満のもの
半壊その他	家屋の経済付異善割合が20%以上40%未満のもの
一部異変	家屋の経済付異善割合が20%未満のもの

#### 2 被害の程度

被害の全体像としては、勿論三次調査対象の被災家屋のみなので、全ての罹災証明対象数ではないが、三次調査だけで7月10日の時点で依頼件数491世帯、処理件数438件であった。毎日3チームに分かれ、1チーム4件、一日12件をこなすが、新たに10件程度ずつ依頼が増えるといった状態だった。

依頼があるものも、二次審査で一部損壊から半壊(大規模)までのものを、さらにランクアップしてほしいというものであり、被害の程度も、基礎の表面に塗ってあるモルタルにヘアクラックが少し入っている程度のものから、地盤が落ち基礎の裏が見えているもの、基礎が爆裂しているもの、床が30°傾いているもの、壁が落ち、建物の内部

がむき出しになっているものまで、様々であった。

建物の種類も一戸建て、マンション、店舗など色々あり、150戸程度のマンモスマンションをマンション管理組合から依頼された際は、流石に全てを1時間半で見切ることができなかった。

判定の結果も、欲目でランクアップを願うもの、実際の程度被害があるのかが心配で、危険度判定や修理の方法相談を兼ねて再審査を願うものもあり、程度が変わらないものも多かったが、見逃しなどで信じられないほどの被害があり、一部損壊から全壊にランクアップになるようなものもあり、三次審査を行った意義があったと言える。



大槻町八坦では、がけが崩れ、全壊の建物が続出した。地割れで50cmほどの段差がついている。



貯水池脇でがけに向かって沈み込み、基礎の下の土が絡げ取られている借家。室内では床に30°の傾斜がついている。



市営住宅で土が液状化で沈んだため、下水管が殆ど折れてしまい、土に接している土間が沈み込んだため1階の腰壁などが破壊されている例。本体に影響があるわけではないので、被害の判定は低い。



マンモスマンションで雑壁が×状に破壊され、扉が開かなくなった例。高架水槽も振られて配管などが破壊されている。しかし、柱・梁などの躯体は問題なかった。



基礎が爆裂した状況



風呂の壁が落ちて中が見える状況



屋根が落ちた状況



梁が割れてきた状況



体育館のガラスが落ちている。



屋根トラスのボルトが破断し落下。



### 3 その他周囲の状況

休みに相馬市の海岸に行ってみたが、建物が流され、基礎が並んでいる状況だった。他都市では瓦礫の整理が進まない状況が続いているとのこと。また、市街地が緩やかな斜面になっており、津波に襲われた場所とそうでない場所の被害の落差が大きかった。多数の方がなくなった場所を目にし、言葉を失い、胸が痛む。ご冥福をお祈りする。

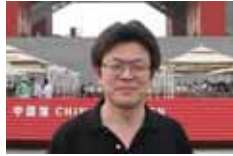


また、各地の環境放射能測定値が毎日テレビで放映されていた。放射能は遺伝子に傷をつけるが、どれほどの被害になるかがすぐに結果が出ないので、言いようのない恐ろしさや不安を皆さん感じておられるようであった。風評被害を含め、収束するのはいつの日であろうか。



## 会員紹介

張 峻屹(ちょう しゅんきつ)  
広島大学大学院国際協力研究科  
教授(2011年10月1日付け)  
略歴



1966年に中国生まれ。北京交通大学卒業、同大学院中退後、文部省国費奨学生として選抜され、1996年3月に広島大学で博士(工学)学位取得、同大学で助手、東京で都市・交通コンサルタント、オランダで客員研究員を経て2002年10月に広島大学大学院国際協力研究科・准教授、2011年10月に同教授。

土木学会、日本都市計画学会、交通工学研究会、エネルギー・資源学会、Transportation Research Boardなど11の学会に所属。Transportation Research Part B、Journal of Intelligent Transportation Systems、Energy EconomicsやTourism Managementなど30近い多分野のトップ雑誌の査読委員、Asian Transport Studiesの副編集長、ベルギー科学基金外部審査委員、土木計画学学術小委員会委員兼幹事など。

### 主な研究テーマと成果

都市、交通、環境と観光のテーマを幅広く取り上げ、日本と途上国の両方をフィールドに、学際的な視点・分野融合的な視点から研究を進めてきている。2011年4月現在、218編の査読付き論文(うち、英文166編)、国際学会発表論文90編、国内学会講演集145編、執筆和文図書11冊(主に分担)を公表した。国際学会招待論文・招待講演を5回(編)発表し、最優秀論文賞(7回)・優秀論文賞(3回)を受賞した。  
(1)市民生活行動学の構築による部門横断型まちづくり政策立案方法論の開発：1990年ごろから交通行動を、2000年ごろからより一般的な市民生活行動を対象に、市民生活を包括的で一体的に扱う新たな学問体系「市民生活行動学」の構築を目指している。2010~2013年度に研究代表者として科学研究費補助金・基盤研究(A)(一般)を獲得し、生活経営学、保健学、環境経済学、都市工学、交通計画学などの視点から低炭素型まちづくり、交通弱者モビリティ支援、都市観光促進、都心活性化などを対象に、行動研究の集大成を図っている。  
(2)総合型観光行動モデルによる観光政策意思決定方法論の開発：観光発生、観光地選択、同伴者選択、交通機関・走行ルート選択、出発時刻、活動タイミング、観光時間利用と消費支出といった観光行動を扱う総合モデルを開発している。  
(3)統合都市モデルの開発：集計型動的交通需要モデル、多市場不均衡理論に基づく交通需要と供給モデル、空間自己相関とフィードバック機能を導入した統合モデル、持続可能な都市発展を念頭に入れた2層型統合都市モデルなど。  
(4)途上国を含む持続可能な都市・交通の研究：都市・交通の視点からみた地球温暖化への適応策、軽減策や移行策、エネルギー消費からみたエコライフ、雇用とモビリティの両立からみたパラトランジットシステムの持続可能な発展など。  
(5)交通安全の研究：既存統計データを用いた交通事故の発生要因や既存安全対策の効果に関する計量経済学的な分析、ITSによる警告情報の提供効果、走行速度と生体情報を活用した走行リスクの評価・モデリングなど。

## 会員紹介

岡村健志(おかむらけんじ)  
高知工科大学 地域連携機構  
助教、地域連携コーディネータ  
略歴



1974年生 / 高知県高知市出身 / 1996年高知大学農学部森林科学科卒業 / 1998年千葉大学大学院自然科学研究科環境計画学専攻修了 / 建設コンサルタントなどを経て、2003年より高知工科大学。地域計画、CALS/EC、地域ITSや道路管理の情報化、地方自治体の情報化事業など産学官連携による事業を企画、開発、評価。現在は主に、問題構造分析やロジックモデルの構築プロセスに関する研究や自治体と協同ですすめる行政経営教育プログラムや地方版スマートグリッドモデルの事業化に携わる。博士(工学)、修士(農学)。

### 問題解決のためのロジックモデル

ところで、問題は解決できたの？そう聞かれて困りました。これまで私は、地域が抱える問題に対して、ICT(Information and Communication Technology)を使った事業の実施に携わってきました。それらの事業の企画から運用において、しばしば見受けられる光景は、各種の条件下において事業の内容や運用方法、使用する技術をどうするかといった決定プロセスです。さて、十分な検討を繰り返し導入した事業は当初解決しようとした問題に対してどの程度貢献しようとしたのでしょうか、あるいは貢献できたのでしょうか。確かに、我々は地域の事情や技術に精通し十分な準備と実施をします。さらに、いくつかの現象や意識を観測することで、事業の効果を確認し続けています。しかし、残念ながら「問題は解決できたのか」という問いにこたえられる準備は十分でなかったように思えます。その問いにこたえるためには、真摯に問題解決の論理を構築することが必要であると考えようになりました。問題となる現象や人々の意識によって構成する問題構造モデルと投入しようとする施策の機能効果モデルが統合化した問題解決のためのロジックモデルが明示的に共有されることで、問題解決の状態を持ち続けることができると考えます。

### 大学の地域貢献、その文脈

高知工科大学の地域連携機構は、地域貢献のための専属教員らで構成する組織です。私はこの4月より地域連携コーディネータとしても活動しております。当初は、初めての役職ですし、「何すんの？」というのが正直な感想でした。コーディネータとは翻訳すると調整役、直感的には地域ニーズと大学シーズをマッチングする役割なのかもしれませんが、マッチングすれば地域貢献できるのかといえば、甚だ疑問です。とはいえ、お節介な企画提案、プロジェクトマネジメント、予算獲得・・・コーディネータに必要な技術と商品、私のコーディネータ論はまだまだクラウドです。今後ともご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## トピックス

### 京橋会館公開イベント

アーキウォーク広島 福馬晶子

平成23年8月13日、14日にこの秋に取り壊される予定の京橋会館の見学会を行った。



#### 1 京橋会館の概要

京橋会館は、広島駅近くの広島県広島市南区京橋町6番に建つRC造地上4階建て、延べ床面積が3762.54㎡の店舗付集合住宅だ。ヨーロッパに多い中庭付口の字型の変形バージョンであり、日本では珍しい形となっている。また、外壁は、縦の連窓や横の連窓、出窓、縦横の飾りの庇など、パウハウスやオランダ・モダニズムを思わせるモダンデザインで彩られている。中庭に面しても店舗があり、中庭自体は子供の遊び場も計画されているなど、コミュニティ形成の場として狙ったものであると考えられる。廊下は中庭に面しており、人の行き来が中庭から見ることができる。



京橋会館の建築の経緯は数奇であり、かつ広島戦後の復興期の歴史と大きくかかわる。京橋会館は、戦災復興期の道路建設に伴い商店街が組合を作り、店舗及び住宅の共同化事業として計画された建築物であったが、簡単には完成しなかった。以下にその経緯を記す。

1946年(昭和21年)10月に、広島復興都市計画街路(駅前吉島線ほか)、広島復興都市計画区画整理が決定され、1948年(昭和23年)9月に京橋町、台屋町付近の仮換地の発表がされた後、1949年の広島駅付近の大火を契機に駅前区画整理が本格的に始まった。都市計画道路駅前吉島線の計画路線にあった京橋地区の商店は立ち退きを余儀なくされ、立ち退く商店約40名で1950年に京橋商店街商業協同組合を設立し、現京橋会館の敷地に住宅金融公庫の融資を受けて店舗付住宅(メゾネット)及び共同住宅の建設を始めた。しかし、資金難を含む諸事情により工事は中断。1953年2月に広島県、広島市、住宅金融公庫、広島県住宅供給公社で協議した結果、広島県住宅供給公社が公庫融資等を受け京橋会館を建設し、公庫融資金の償還を完了したときは、建物を広島市に無償譲渡することとし、1953年3月広島市と広島県住宅供給公社が京橋会館の建設及び建設資金等に係る契約を行った。結果、めでたく1954年(昭和29年)11月に完成することとなる。1990年(平成2年)4月ようやく公庫融資金の償還が完了し、広島県住宅供給公社より広島市に建物の無償譲渡を受け、市営住宅及び市営店舗として今日まで管理されてきた。

近年、老朽化が著しく、3～4階には風呂がない、エレベーターがないなどの現代の生活に伴わないプランであることなどから、建て替えが検討され、京橋町地区第一種市街地再開発事業として、広島京橋開発企業体が施行し、地下1階、地上21階、高さ70mの高齢者向け賃貸住宅や分譲住宅、デイサービス、クリニック、子育て支援施設等の複合施設として建て替えられることとなり、2013年(平成25年)12月に竣工予定となっている。

## 2 公開イベントの様子

公開イベントは、二日とも13:00~17:00に行った。イベント当日は、鍵を開けた数部屋や屋上などを自由に見学できるようにしたほか、解説パネル展やビデオ上映を行う部屋を設けたり、当日の予約制で合計8回の説明付ツアーを行ったりするなど、京橋会館について知る機会が持てるよう工夫した。

また、2日目には、ボランティアのアーティストによるライブペイントパフォーマンスをはじめ、来場者に描いてもらった京橋会館のスケッチを中庭に向けた廊下に展示する「思い出スケッチ」、夕暮れ時にはコーラスや、ピアノ・バイオリンによるコンサートなどを行った。



結果として、初日600名、二日目800名、計1400名の来場があった。中国新聞を含む新聞5誌、HFMやRCCなどのラジオ、NHKやRCCなどのテレビにタイミング良く出して頂いたり、ツイッターやfacebookなどにより関心のある人が個別に情報発信して頂いたりしたことが多くの人を集めた理由と考えられる。

来場された方のタイプも様々で、建築業界の人のみならず、芸術に興味を持つ美術有漢計の方、建築に興味を持つ多数の若者が参加していたのが興味深かった。また、お住まいになられていた方や町内会の方々にも多数来ていただいたことも主催者として嬉しいことであった。来場した若者の中には、建築マニア(特に団地好きの人)も多くいたが、オシャレな現代風な若者が多く来場したことも特筆すべきことであり、レトロな雰囲気魅了されたのか、2日間、最初から最後まで見学している方までおられた。

## 3 所感

2日間、合計8時間で1400人を集客した京橋会館へ人々の熱意は並々ならぬものがある。それは、もう少しで失われてしまう戦後復興期の情熱に対する憧れなどではないかと思う。それは、老いには懐かしく、若きには新鮮さをもって訴えかけるのではないか。来場した人の中には、「ヨーロッパのように、不便でもいいから、古い建物の内部を改装して住みたい」という人もおられた。災害が多いこの国では老朽化は悪とされるが、情熱の歴史を継承した建物が未来に向けて少しでも残ると良いと思う。

## 本部理事会報告

7月1日本部において平成23年度第3回理事会が、またそれにあわせて、支部長連絡会が開催されました。両会合で報告・討議された事項および決定された事項について、主な内容を下記にご紹介します。

### 会員数

7月1日現在、会員数は4,866名(うち正会員4,414名)です。微減傾向が続いています。

### 公益社団法人への移行

3月29日に公益法人認定申請を行い、6月24日に公益認定等委員会から「相当」との答申ができました。10月3日に公益社団法人としての移行登記の申請を行い、11月18日の総会を経て役員登記を完了させる予定です。答申内容は、委員会HPトップページの「[答申・勧告・決定等](#)」リンクから見ることができます。

### 評議員制度の見直し

公益社団法人への移行にあたって「評議員」の名称が使えなくなることから、「アドバイザー会議」と改称し、それにあわせて会長の諮問機関としてより有効な制度に見直す方向で検討が行われています。

### 支部研究発表会の位置づけ

これまで、各支部が任意に開いていた支部研究発表会を、学会行事として明確に位置づける準備をしています。このため、「支部都市計画研究発表会開催規程」を作成し、それにあわせた支部ごとの細則を用意して、新法人移行後に適用し、実質的には2012年からその規程にもとづいた研究発表会を開催することとなります。中国四国支部では、これまでの開催内容と変わらなくなることはありませんが、発表実績を公称することが容易になります。

11月18, 19, 20日

11月18日には、総会および60周年記念式典が開かれます。つづいて、19, 20日には、学術研究論文発表会が開かれます。いずれも、東京大学本郷キャンパス。なお、60周年記念事業としては、次の7つの事業が進行中または企画されています。

記念式典・シンポジウム・交流会 / 『都市計画』60周年記念号の発行 / 『(仮称)日本の都市づくり』の出版 / 学生提案競技 / 自治体まちづくりグッズ賞 / まちづくり懇話会シリーズ企画 / 記念パネルディスカッション

### 自治体まちづくりグッズ賞

60周年記念事業のひとつとして企画した同賞に、202件の応募があり、審査作業終了。近々学会誌で発表し、60周年記念式典で表彰が行われます。

### 60周年記念シンポジウム

「未来へつなぐ 日本の都市の可能性」をテーマに、記念式典に続けて開催を予定。

### 『(仮称)日本の都市づくり』

おおむね原稿が出揃い、11月上旬刊行を目標に編集作業が進んでいます。B5版フルカラー230ページ、朝倉書店から販売予定。

### 学術研究論文発表会

今年度の応募論文283編。現在審査中。

### 研究交流組織の公募

平成23年度研究交流組織の公募が行われています。応募締切は10月7日、今年度の窓口は北海道支部です。

### 防災・復興問題研究特別委員会

鳴海委員長のもとで、第1部会(復興まちづくり)第2部会(都市防災)第3部会(社会システム再編)の3つの部会が編成され、活動しています。また、「地域基盤再構築に関する日本都市計画学会・杜牧学会連携委員会」(岸井隆幸委員長)が設置された旨と、今後の目標・作業イメージについての報告がありました。2012年9月まで3期に区分した作業を経て、(1)被災状況・復興計画の立案・事業実施までの記録整理(2)今後の研究の方向性の提示(3)東海・南海・東南海・首都直下を意識した課題の整理、としてとりまとめを行う予定です。

### 他支部のトピックス

<北海道支部>「東日本大震災と都市計画」のテーマで都市計画セミナーを開催

<東北支部>学術合同調査委員会第4部門(土木・都市計画)に正式参加して活動。

<中部支部>研究発表会企画委員会(仮称)を新設。研究室紹介大会を11月に開催予定。

<関西支部>10月に20周年記念式典を予定。「東日本大震災復興都市づくり特別委員会」を新設。

<九州支部>来年20周年記念事業のリレー開催を行う予定で企画。

## お知らせ

地域活動助成・自主研究会支援団体の公募結果

平成23年度の地域活動助成と自主研究会支援団体の公募(期間:8月2日~8月31日)の結果、次の活動・団体が採択されましたので、お知らせします。

### 【地域活動助成】

事業名:高松市のコンパクト・エコシティ見学会と情報交換会(仮称)

実施時期:2011年10月28日(金)

実施場所:高松市 サンポート高松(予定)

事業主体:近藤光男(徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

### 【自主研究会支援団体】

名称:地方工業都市研究会(継続)

代表者:鶴心治(山口大学大学院教授)

助成活動:研究報告会

実施時期 2012年2月~3月

実施場所 山口県内

## 今後の活動予定

「広島郊外住宅団地サミット」ワークショップ

日時:2011年9月27日(火)13:00~16:45

会場:広島市市民まちづくり交流プラザ  
北館6階マルチメディアスタジオ

定員:広島郊外住宅団地居住者等60名  
学会関係者は傍聴

NPO住環境研究会ひろしま等との共催事業

支部10周年記念事業 - プレシンポジウム -

日時:2011年10月1日(土)13:00~17:00

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ  
北館6階マルチメディアスタジオ

プログラム

第1部 特別講演

第2部 パネルディスカッション

「中国四国地域の都市計画~この10年で変わったこと、変わらなかったこと、そして未来へ~」

高松市のコンパクト・エコシティ見学会と情報交換会(仮称)

日時:2011年10月28日(金)

会場:高松市 サンポート高松(予定)

(詳細は、確定し次第、会員メールでお知らせします。)

2011年度 学術講演会

日時:2011年10月29日(土)13:30~16:00

会場:西区民文化センター 2階スタジオ  
テーマ:「松井市長と若者が語る広島の未来」

プログラム

基調講演:松井一實氏(広島市長)

意見交換会

高田真氏(アーキウオーク広島代表)

木原一郎氏(広島大学大学院)

定員:150名

詳しくは支部HPをご覧ください。

<http://www.chiikikb.co.jp/c-plan/>

## 編集後記

今号のNLは、いかがでしたでしょうか。

低炭素社会の実現に向けた中国四国地域の取組みの紹介や震災・戦災からの復興に向けた活動・調査研究報告そして、古き時代の良い伝統や遺産を護り、伝え、育てる取組みの紹介など、多岐にわたる盛りだくさんの内容でした。秩序を重んじ、仲間や伝統を大切にしながら、神仏や自然を敬う日本人の気質を垣間見ることができたようにも感じました。

様々なメディアでも報じられていますが、東日本大震災の復興に向けて多くの人々の地道な努力が積み重ねられ、何とか日々の暮らしを営むことができるようになった被災者の方々も増えつつあるようです。しかし、被災者の方々が本当に望む復興が叶うまでには、まだまだ遠く険しい道のりがあるのも事実です。

例えば、世界三大漁場として知られる三陸沖から水揚げされる数々の漁港の施設が壊滅的な被害を受けたことは、みなさんもよくご存じのことと思います。水揚げ東北地方1位の気仙沼漁港に赴いた知人の話では、岸壁などの施設は、構造物自体は破壊されていないが、施設全体が1メートル以上沈下し、満潮時には岸壁だけでなく背後の施設も水没するため、漁港としての機能を果たせない状況になっているようです。忽ちは岸壁などを嵩上げすれば、復旧できるのですが、余震を繰り返しながら地盤が少しずつ上昇し続けており、基準となる高さを決定しづらい状況にあるそうです。わずかに水揚げされた魚で、細々と魚市場を再開された漁業関係者も居られるようですが、それぞれの港から大漁の水揚げされた鮮魚が、日本中の食卓に届くのは、やはり随分、先の話のようでした。

先日、タイ・ハマチの良ポイントとして知られる柳井市上関沖の平郡島付近で船釣りをしてきましたが、たくさんの海の恵みを有難く頂きました。海に囲まれた日本列島には、これほど豊かな海の資源が広がっているにも拘らず、それらを楽しむことができないことが、どれ程辛く、もどかしいものなのか想像に耐えられません。NHKのドラマで「たくさん傷ついた人は、これからたくさんの幸せを手にする権利がある」というような話を聞きました。まさにその通りだと思います。被災者の方々の幸せな日々が、少しでも早く訪れることを切に願っております。

次号の配信は、年明け1月の予定です。ホットコーナーやコラム、トピックスなど、学会員の皆様からの原稿をお待ちしております。何かございましたら、総務委員会事務局(藤岡総務委員長 e-mail: [cp-fujioka@chiikikb.co.jp](mailto:cp-fujioka@chiikikb.co.jp))までご連絡いただければ幸いです。

(文責:長谷山 弘志)

編集委員:長谷山弘志(編集長)、石村壽浩、周藤浩司、高田禮榮、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也、吉原俊朗